

特別講演Ⅱ

アルブレヒト・デューラーの素描と版画におけるヴィジュアルとマテリアル

ボン大学教授 アンヌ・マリー・ボネ

(文・青山愛香)



ボン大学教授(美術史家/アートキュレーター/美術評論家)。ボン大学でルネサンスから近・現代美術史の講座を担当。アートキュレーター、美術評論家としても幅広く活動している。美術史の歴史および方法論、ミューゼオロジー、アート界の構造全体に関心がある。近年の主な研究業績は『デューラー、ヌードの発見』(ミュンヘン、2014年)、『ルネサンスの画家 クラナハ』(ミュンヘン、2015年)ほか多数。

ラーの芸術に対する次のモットー…「芸術 Kunst は自然 Natur に潜んでいるのであって、それを取り出すことのできる者がそれを得るのである」によく現れている。この時期絵画において遠近法という新しい世界の発見と「リアリズム」が追求されたが、この可視性に対する実験的な試みをデューラーは素描で行った。デューラーは素描、版画、油彩画という技法の違いを戦略的に使い分けたが、デューラーの素描はとりわけコンセプチュアルであり、しばしば彼の芸術のマニフェストとなる。

デューラーは自然主義と技巧性の間の緊張関係の中で、自身の新しい芸術概念を展開させていった。水彩素描《芝草》も一見自然そのものでありながら、黄金分割比に基づきコンセプチュアルに構成された自然である。またデューラーはマンテーニャの銅版画を模写した素描《海神》(ウィーン、アルベルティナー美術館所蔵)(図二)でマンテーニャを経由した古代風の人体に繊細なモデリングを施すことで、より人体に触角的な物質性を与えた。そして銅版

画《ネメシス》(図三)において新たに「構成された女性ヌード」に取り組みながら、皮膚、金属、風、鳥の羽の質感を描き切った。自然主義/リアリズムは可視性を担保するものであり、物質性はその手段であった。

レオナルドとアルベルティというイタリアの偉大な規範は、自然と身体表現を規制し、それらを古代のヴィトルヴィウスの基準に図り理想化した。しかしデューラーの身体は『人体均衡論四書』(一五二八年)に見られるような、実際の計測の実践の総括である。彼は自然研究において自然と裸の身体を再び解放し、自然の性状をむきだしにし、それを触角的に感じ取れるようにすらしめた。デューラーは独自の方法で、自然性と可視性の文法を発展させたのである。



図1 デューラー《芝草》、水彩とグワッシュ、ウィーン、アルベルティナー、1503年頃



図2 デューラー《海神》(マンテーニャの銅版画的模写)、ペン素描、ウィーン、アルベルティナー、1494年



図3 デューラー《ネメシス》、銅版画、1501年頃